られ、第二篇穆天子傳の性質をのべて、周穆王の西征と當時の東西の交通が明にしられた。この篇添付するに黄河水源問題がある。古代の伏流說と、元代踏査の實蹟をのべられた。第三篇には阡陌と井田を論じ、羅馬人の都邑及び田野區劃法が詳述され、周代の阡陌及井田、孟子の井地制がのべてあるこの篇は描著尺度綜考の地割論の足らざる所を補ふものであつて、予は讀者のこの書を參照せられんことを祈るの念が切である。先生の文章と文字とは六ヶ敷いといふことであるがこれを讀みこなすやうでなくては、東洋の人文地理は明にされぬであらうことを附言する。（藤田）

○讀史叢錄

昭和四年八月　弘文館發行　内藤虎治郎著　定價五圓

本書は内藤博士が、講學の餘暇に藝文や史林に執筆されたものを蒐錄したものである。收むる所は二十八篇、その中人文地理に關したものが多い、第一篇卑隅叫考は當時の學界を驚かしたものであり倭面土國考と共に我上古を學ぶものゝ必讀の文字である。新羅眞興王巡境碑、明東北疆域辨誤や、清朝姓氏考などは、我國の根の國であらうと考へらるゝ、東西の東北地方を學ぶものゝ參考であり、蒙古開國の傳說の如き我國の神話と關係が深いのもその証左である。本書には猶王亥及綴王亥の考說がある、これによつて夏殷人の命名及古傳說が論じてある、これも地名研究家の見逃してはならぬ文字である。地理學家來思本によつて、支那古代地圖學の發達をしり、樂浪遺蹟の集具によつて、古代の交通を證し、隼人石考によつて十二支神像とその起源を同じくするを知るが如き本書から學ぶべきことは多い。人文地理學者にその閱覽をすゝめる。（藤田）

○等高曲線白地圖及說明書

本間不二男著　古今書院發行　定價七十五錢

信濃教育會小縣上田部會が本間理學士に依囑して、中部地圖及地質圖をつくり始めたのは五年以前のことであつた、小野三正氏が永い間その製圖に努力したことも多きかつた。出來上つて見ると、その等高曲線の白地圖が、いかにも美はしいので、これによつて地形の說明を學ぶものゝ栞にしたのが本書である。輪廻地形の殘りや、斷層地形、山の地形、谷の地形、火山地形といつたものが各其特色をしめしてゐる部分によつていかに之を讀解すべきか、之によつていかに地理が理會されるかといふことが詳密に示めしてある、予は本書によつて中學校などで地形を教ふる際の手引にしられることの盛んにならんことを祈つて、その閱讀をすゝめる。猶右出來上りの地圖が極めて廉價で同書店から頒布されてゐることは讀者の既に知れる通りである。（藤田）

新著即報

◎安房線建設概要　鐵道省　四月

○史蹟名勝天然紀念物調査報告　第四輯（天然紀念物之部）

山梨縣　四月

富士北麓の熔岩隧道(石原初太郎)
富士北麓の熔岩樹型(石原初太郎)
燕岩岩脈(石原初太郎)
忍野八海(石原初太郎)

○東京帝國大學地震研究彙報　第六號　四月
昭和二年丹後地震後の水準測量成果の一解釋
(英文)(坪井忠二)
潮汐の負荷による地殼の傾斜運動(英文)(高橋龍太郎)
砂層の崩壞に關する實驗(第二報)(英文)(寺田寅彦、宮部直巳)
地震發生の機巧に就いて(英文)(藤原咲平、高山威雄)
地震の震源の位置と地震波の傳播速度とを求める圖法(英文)(高橋龍太郎)
丹後地震の餘震觀測調査報告(第一報)(那須信治)

○滿蒙　第十年第五號　五月
支那農民の離村に就て(二)(田中忠夫)

○滿蒙　第十年第七號　七月
旅順口の沿革と旅順城の位置(上)(島田好)

○中央氣象臺歐文彙報　第二卷第一號　三月
Shallow and deep earthquakes (2nd paper) (K. Wadati)
Note on the North Tango earthquake of March 7, 1927. (S. I. Kunitomi)

○中央氣象臺歐文彙報　第二卷第二號　三月
On the motion of air near the earth's surface. (Y. Isimaru)
A mathematical investigation of the underground temperature observed with earth-thermometer. (Y. Kodaira)
On the behavior of lines of discontinuity, cyclones and typhoons in the vicinity of Japan. (S. Fujiwara)

○科學知識　第九卷第五號　五月
初めて吾人の眼に觸れた有史以前の巨獸(大島正滿)

○科學知識　第九卷第七號　七月
世界的に珍しい富士山の熔岩樹型(石原初太郎)
北支那の風土(木名瀨松壽)

◎滿俺鑛ニ關スル調査　商工省鑛山局　昭和三年十月

◎丹後地方震災地復舊一等三角測量記事　陸地測量部　三月

◎丹後地方震災地復舊二等三角測量記事　陸地測量部　五月

○地質研究所彙刊　第一號　國立中央研究院　一九二八年十一月
湖北陽新大冶鄂城之地質礦產(葉良輔、趙國賓)

○地質研究所彙刊　第二號　一九二八年十一月
湖北大冶鄂城陽新一帶火成岩之種類(何作霖)

○地質研究所彙刊　第三號　一九二八年十一月
湖北蒲圻嘉魚咸應用崇陽武昌等縣地質(李捷)

○*Bulletin of the Geological Survey of China. No. 12*

April.

Geological reconnaissance of Western Kueichou. (S. S. Yoh)

Geological reconnaissance of Southern Kueichou. (S. S. Yoh)

Notes on the geology of the Pou Mu Chung oil field near Kueiyung, Kueichou Province. (S. S. Yoh)

Copper ores of S. E. Hupei (H. T. Lee)

Geology of Kaiping basin and its environs. (Y. T. Chao, C. Y. Lee and T. F. Hou)

○*Palaeontologia Sinica. Series B. Vol. 13. Fasc. 1, Dec. 1928.*

Cretaceous fossil insects of China. (C. Ping)

○Palaeontologia Sinica. Series B. Vol. 2. Fasc. 2. Palaeozoic Corals of China Part 1. Tetraseptata. (A. W. Grabau)

◎一九二九年版天文年鑑　天文同好會編　新光社發行　四月
定價一圓五〇錢

○石油時報　第六〇五號　六月
北樺太石油事業の近況に就て（中里重次）

○石油時報　第六〇六號　七月
世界石油業概觀（上）（松澤傳太郎）

○水路要報　第八年第八號　七月
仁川臺北大沼及バラオに於ける昭和三年磁氣測量（村元明一）

○鉱業石炭鑛業組合月報　第二五卷第三〇〇號六月
火成岩によりて變化せる石炭の工業分析報告（上治貞次郎）

○日本鑛業會誌　第四五卷第五三〇號　六月
世界石油業概觀（松澤傳太郎）
地質時代と石油の產額（大村一藏）
日本油田の地質及鑛床（大村一藏）
北樺太の石油鑛業（山田文雄）
秋田縣の石油鑛業（谷口源吉、岩崎喜代志）
臺灣石油鑛業及技術（上野幸作）

◎日本案內記　東北篇　鐵道省　三月

○地學雜誌　第四一年第四八五號　七月
支那古代に於ける中央亞細亞の交通路に就て（一）（小川琢治）
臺灣桃園臺地の礫層に就て（市川雄一）
高原火山其間雜第三紀層に發見せる所謂化石三稜石に就て（一）（田山利三郎、新野弘）
南樺太炭田の層位に就て（三）（今井牛次郎）
河南省地質巡見記（四）（渡邊久吉）
歐國ヨムバ油田（千谷好之助）

○ヤキナス　第一卷第三號　五月
館山灣底棲貝類調査（二）（藤田正、黑田德米）
日本產有殼軟體動物總目錄（一）（黑田德米）

○朝鮮鑛業會々報
第七七號　五月
地質圖の讀方(一)(向江生)
第七八號　六月
南滿洲の鑛業現況(三澤正美)
地質圖の讀方(二)(向江生)
第七九號　七月
地質圖の讀方(三)(向江生)
○日本教育　第八卷第八號　八月
岩漿分化略說(本間不二男)
○朝鮮鑛業會誌　第一二卷第二號　六月
朝鮮に於ける石炭(一)(素木卓二)
○我等の化學　第二卷第六號　六月
布哇(中瀨古六郎)
○地質學雜誌　第三六卷第四三〇號　七月
隱岐島後の地質學的並に岩石學的研究(七)(富田達)
樺太內淵炭田に於ける內淵層と夾炭層との關係に就いて
(川崎勝)
○地學雜誌　第四一年第四八六號　八月
北方文化建設の使命(喜多孝治)
樺太島の地形及び地質に關する數問題(德田貞一)
樺太の商工業(小西善太郎)
樺太の水產(藤田經信)
樺太の林業(中村賢太郎)
樺太島のポドゾル土壤の特性と農業(時任一彥、正見透)
樺太に於ける有用鑛物の種類及鑛業(可野信一)
◎故佐藤傳藏君追悼錄　八月　東京高等師範學校博物學會
○鑛　業
第六五號　七月
九州並に山口縣の重石鑛(一)(石川成章)
第六六號　八月
九州並に山口縣の重石鑛(二)(石川成章)
○地　震
第一卷第七號　七月
昭和三年五月廿一日千葉縣下に起りたる地震の走時の研究(特にP波の速度に就て)(河角廣)
第一卷第八號　八月
駒ヶ岳噴火調査(岸上冬彥)
地震學に於けるラヂオの應用(波江野清藏)
○地理學評論
第五卷第八號　八月
棉花の經濟地理的研究(佐々木彥一郎)
河岸段丘の非對稱的配置と其の成因(四)(東木龍七)
クツクの第三次探險船の日本通過(秋岡武次郎)
交替作用の法則(佐藤弘)
第五卷第九號　九月
北海道の氣候學的研究(福井英一郎)
河岸段丘の非對稱的配置と其の成因(五)(東木龍七)

八ヶ岳火山山麓の景觀型(上)(三澤勝衛)

○岩石礦物礦床學

第二卷第二號　八月

本邦に於ける第三紀金鑛礦床特に高玉礦山産氷長石に就て(神津俶祐、深見俊三郎、木下龜城)

神岡礦山産珪灰鐵礦に就て(渡邊萬次郎)

礦物の潤度に就て(鈴木庸三九)

幌内頁岩の化學成分(八木次男)

第四回太平洋學術會議列席旅行記(一)(益田峰一)

第二卷第三號　九月

昭和四年六月駒ヶ岳火山大爆發調査概報(神津俶祐、渡邊萬次郎、吉木文平、瀨戸國勝、八木次男、益田峰一、渡邊新六、上田潤一)

クラカトア火山の爆發(神津俶祐、益田峰一)

○地理教育

第一〇卷第五號　八月

强國の概念と現代諸强國(飯本信之)

礦産上より見たる現時の列强(渡邊萬次郎)

英國の産業(遠藤金英)

西藏探險秘史(二)(内田寛一譯)

支那江南の名勝(下)(後藤朝太郎)

第一〇卷第六號　九月

地殼の陰動と其地表に於ける表現(藤原咲平)

駒ヶ岳火山と爆發(上)(田上政敏)

日本經濟區に就いて(二)(富士德治郎)

日本群島の三角洲の研究(五)(東木龍七)

西藏探檢秘史(三)(内田寛一譯)

南アメリカ經濟地理(七)(下田禮佐)

○科學畫報

第一三卷第二號　八月

蜒蜒一千五百哩大長江を遡る(後藤朝太郎)

ダニューブの鐵門(高橋純一)

炎熱沙漠の清涼蓮大ナイルを遡る(一氏義良)

ヴォルガを下る(廣岡文)

神秘と傳説の河ガンヂス(逸見梅榮)

富士の熔岩隧道めぐり(石原初太郎)

山の寫眞の寫し方(鎌田彌壽治)

第一三卷第三號　九月

地球大氣に對する太陽活動の影響(藤原咲平)

經度緯度の話(水野良平)

◎鑛物學地質學講義　河村信一著　四月　古今書院　定價二圓八〇錢。

◎等高曲線白地圖説明及等高曲線白地圖　本間不二男編著　八月　古今書院　定價七五錢

◎地質鑛物學綱要　田上政敏著　中興館　四月　定價三圓五〇錢

◎世界地理風俗大系　第十八卷　(カナダ・アラスカ及びメキシコ・中米・西インド)執筆者　石橋五郎、今井登志喜、

大村一藏、北田正一、佐藤弘、田中阿歌麿、田村剛、堀口九萬一、宮武辰夫、渡邊萬次郎、新光社、七月、豫約價二圓八〇錢

◎Asie des mousssons. 2. partie. (Inde—Indochine—Insulinde) Par Jules Sion. (Géographie universelle. Tome IX) Colin, Paris. 1929.

◎昭和四年版日本國勢圖會　矢野恒太編　日本評論社　六月　定價一圓

◎臺灣遊記　德富猪一郎著　民友社　七月　定價一圓五〇錢

◎大日本地誌大系　第十八卷五畿內志泉州志　雄山閣　七月

◎大日本地誌大系　第十九卷新編鎌倉志鎌倉攬勝考　雄山閣　八月

◎地理學通論　第二册　高橋純一著　隆文館　四月　定價四圓

◎地理學通論　第三册　高橋純一著　隆文館　七月　定價四圓

◎日本學術協會報告　第四卷(昭和三年福岡)　七月

結晶學と數學　(中村清二)

地塊運動の經過(山崎直方)

地下水量測定に就て(野蒲隆治)

金相學發達の歷史とマンガン合金の狀態圖(石原寅次郎)

アルカリ性白土に就て(磯部甫、遠藤義臣)

石炭の風化に關する研究(第一報)(栗原鑑司、伊木貞雄)

鹽原火山と地帶構造との關係(矢部長克)

諏訪盆地の重力偏差分布に就て(松山基範)

日本產紅簾片岩の時代と變質相との關係(吉井正敏)

東部內蒙古タプスノールに於ける天然ソーダの現出狀態概說(新帶國太郎)

男鹿半島の地體構造(大橋良一)

火成岩の接觸による石炭の變化に就て(上治寅次郎)

日本海沿岸の火山作用に就て(小川琢治)

東亞に於ける鑛物資源(高壯吉)

斷層の立體的圖示法(森下正信)

紀伊鬼ヶ城に殘れる過去大地震の自然記錄(脇水鐵五郎)

九州植物地理概論(田代善太郎)

國產燐礦の利用(木田芳三郎)

朝鮮、支那、沖繩、臺灣各地方住民に於ける血液型分布の研究(桐原眞一)

海洋研究の必要(雨宮育作)

關東亞に近畿地方に於ける地震活動の循環と大震前の諸現象とに就て(今村明恒)

○*Comptes Rendus des Séances de l' Académie des Sciences. Paris. t. 188. No. 12. Mars, 1929.*

Le courant Kuroshio du Japan. (J. Thoulet)

○*Nature. London.*

Vol. 123. No. 3098. March, 1929.

The Transvaal Fossil Human Skeleton.

(Robert Broom)

Vol. 123. No. 3099. March, 1929.

Greenland : as it is and as it was.(A. C. Seward)

Vol. 123. No. 3103. April, 1929.

Geological Aspects of the Channel Tunnel Scheme. (John Pringle)

Vol. 123, No. 3114. July, 1929.

The Distribution of the Chemical Elements. (V. M. Goldschmidt)

○*Science. Vol. LXIX. No. 1800. June, 1929.*

Sinanthropus pekinensis—the Recovery of Further Fossil Remains of this Early Hominid from the Chou Kou Tien Deposit. (Davidson Black)

○*The Philippine Journal of Science. Vol. 38. No. 3. March, 1929.*

Concretions in water-laid tuff in the Philippine Islands. (J. M. Feliciano)

○*The Journal of Geology. Vol. XXVII. No. 4.*

Chamberlin's Philosophy of Correlation. (Charles Schuchert)

"Dynamics is the Soul of the Problem". (Bailey Willis)

○*The Geological Magazine. Vol. LXVI. No. 780. Jnne, 1929.*

The Theory of Dilatation : An Essay Review. (J. Moscheles)

○*Geographical Review.*

Vol. XIX. No. 2. Apr. 1929.

Can Japan develop industrially? (J. E. Orchard)

Vol. XIX. No. 3. July, 1929.

The Wilkins-Hearst Antarctic Expedition, 1823—1929. (Hubert Wilkins)

The Significance of Sir Hubert Wilkins' Antarctic Flights. (H. R. Hill)

The Gulf Stream and its Problems. (H. A. Marmer)

An Isopleth Map of Land under Crops in India. (W. D. Jones)

○*The Quarterly Journal of the Geological Society.*

Vol. LXXXV, Part 2. No. 338. June, 1929.

The Geological History of the Atlantic Ocean. *Presidentary Address.* (John Walter Gregory)

○*Bulletin of the American Association of Petroleum Geologists.*

Vol. 13. No. March, 1929.

Tectonics of the Valle Grande of California. (B. L. Clark)

Vol. 13. No. 5. May, 1929.

Tectonic Classification of Oil Fields in the United States. (W. A. Ver Wiebe)

Environment of Pennsylvanian Life in North America. (R. C. Moore)

Vol. 13. No. 6. June, 1929

History of the Carboniferous Sediments of the Mid-Continent Oil Field. (M. G. Cheney)

En Échelon Tension Fissures and Faults. (T. A. Link)

○*The Pan-American Geologist.*

Vol. LI. No. 4. May, 1929.

Mineralogical Composition of Chinese Loess. (H. T. Lee)

Peneplanation of Continental Divide. (C. Keyes)

○*Centralblatt für Mineralgie, Geologie und Paläontologie.*

Abt. B. 1929. No. 4.

Faltungen und Ueberschiebungen durch Gleitung (Rutschung grössten Massstabes). (J. Stiny)

Abt. B. 1929. No. 5.

Die geologischen Ergebnisse der Deutsch-Russischen Alai-Pamirexpedition 1928. Ein vorläufiger Bericht. (L. Nöth).

Abt. B. 1929. No. 6.

Die Bedeutung alter Massen für Lage und Struktur jüngerer Kettengebirge. (K. Leuchs)

○*Geologische Rundschau. Bd. XX. Heft 2. Mai, 1929*

Versuch einer Skizze der Paläogeographicshen Beziehungen Südamerikas. (F. V. Huene)

Zweiter vorläufiger Bericht über die geologischen Forschungsergebnisse der Deutschen Zentralasien-Expedition. (H. de Terra)

○*Annales de Géographie.*

XXXVIII. No. 212. Mars, 1929.

La morphologie du Plateau Central de la France et l'hypothèse enstatigue. (Emm. de Martonne)

La surpopulation japonaise. (É. Dennery)

XXXVIII. No. 213. Mai, 1929.

L' Atlantide de Platon. (V. Bêrard)

Règions Calcaires de l' Indochine.(L. Cuisinier)

○*Zeitschrift für Vulkanologie. Bd. XII. Heft. 1. Apr. 1929.*

The Geology of Kauai and Niihau, Hawaiian Islands.(N. E. A. Hinds)

○*Zeitschrift der Deutschen Geologischen Gesellschaft. Bd. 80. (1928) Heft 4. 1929.*

Der Vulkan Avatschinsky in Kamtschatka und die Produkte seines Ausbruches vom 28. März 1926

(P. Nowograblenow und P. Tschirwinsky)

○Metallization from Basic Magmas. By Carlton D. Hulin. (*Bulletin of the Departm. of Geol. Sc., Univ. of California Publications. Vol. 18. No. 9.*) 1929.

○*Nachrichten von der Geselbschaft der Wissenschaften zu Göttingen. 1928. Heft 2. 1928*

ueber europäisch-zentralasiatische Gebirgs-zusammenhänge. (H. Stille)

雜　報

○鈴鹿の筆捨山　(圖版第四版の說明)

關西線關驛の北三粁に在る東海道の一名勝、第三紀古期礫岩砂岩の奇怪なる形狀を成した丘陵にして、狩野古法眼元信が雲烟去來の山貌を寫さんとして筆を投じて已んだといふ傳說があつて、中央水田の先に見える小屋は昔の此の勝景を眺望する茶屋の遺跡といふ。但し筆捨は振捨の轉訛で西行法師の鈴鹿を詠じた浮世を振りすてゝといふ句から出たとの說もある。今は山頂の老松古杉全く伐り去られて兀々たる殺風景を呈するのは遺憾である。

觀音山は同じく礫岩砂岩のつくつた丘陵であつて關の町はづれにある。

○支那の菜種

製油原料としての、植物種子は支那に多い、其主なるものは大豆、桐實、落花生、菜種、胡麻、棉實、辛子種、亞麻種、麻實、茶實等であるが、その中菜種は製油原料として我邦に輸入さるゝ量も大きい。

その主產地は、黃河、揚子江の沿岸で、江岸の方が多い、上海に出廻る菜種は主として浙江、江蘇、安徽、湖南、湖北江西即江岸の各省であつて、浙江、江蘇、安徽、三省のみでも年額三百萬擔に達する、之等は產地によりて、蕪湖物、常熟物、平湖物、浦東物、蘇州物、漢口物、溫州物、寧波物などゝ稱せられて賣買せられる、粒子の色相によりて黃粒、黑粒、褐粒及混粒の四つに區別し、黃粒といふは黃色にして油分が多い、江蘇の產である、黑粒以下は油分が少い、昔は種に泥を混入してごまかしたが、大正十五年以後改善されて、雜分三分以內になつた、これは日本全國製油聯合協會と在上海日本人穀肥同業組合との間に協定が出來て。公認鑑定人が品質を檢定するやうになつてゐる結果である、猶夾雜物の中に辛子種を混入するときは製油の色が混濁するので、大に警戒されてゐる。

菜種の出廻りは早きは五、六月で、七月が盛である、單位は一石であるが、各地不同であるけれども、大體は一一〇斤乃至一一八斤である、大戰中は歐洲へ向けられたが、近頃は日本へのみ輸出される。

本年度蕪湖、漢口其他產地の作柄は良好で、品質もよい、